

コラム 歴史の風

グローバル化と仮想現実世界の拡大

高山 博

本稿では、『史学雑誌』の読者が多かれ少なかれ関心をもち、今の世界の変化と特徴を語るうえで私が最も重要だと思っている二つの事柄、グローバル化と仮想現実世界の拡大についての所感を述べたいと思う。今の私の研究上の関心は、「中世シチリア」

「中世ヨーロッパの統治システム」と、この「グローバル化と仮想現実世界の拡大」である。「中世シチリア」は、大学学部生時代からの私の研究の核であり、私の研究者への道を決定づけた研究対象でもある。多様な文化が重層するその歴史の複雑さと多言語史料読解の困難さは多くの未解決の謎を残しており、知的刺激に満ちている。「中世ヨーロッパの統治システム」は、ほぼ三〇年間、大学院演習で学生たちと一緒に検討してきたテーマであり、私自身の西洋中世研究の重要な骨格を作ってくれている。これらの二つのテーマが私の専門の西洋中世研究であるのに対し、「グローバル化と仮想現実世界の拡大」は、今自分が生きている現代世界を理解したいという欲求に基づいたものである。

「グローバル化 (globalization)」という言葉自体はメディアでも頻繁に使われており、多くの人にとってはすでになじみのある言

葉だろう。私が何年か前に大学の授業で「グローバル化とは何か、誰が説明してくれませんか?」と問いかけたとき、手を挙げてくれたのは五〇数名のうち二・三名しかおらず、「国際化という意味ではないでしょうか?」、あるいは、「経済活動や人々の活動が国際化していることではないでしょうか?」という回答だった。確かに、「グローバル化」という言葉は「国際化」とほぼ同じ意味でもちいられることが少なくないように思うが、両者を区別・対比することによって「グローバル化」の意味がよりよく理解できる。Globalizationという英語の使用例は一九六〇年代まで遇れるが、この語が英米と日本のメディアで頻繁に使われ始めたのは一九八〇年代〜一九九〇年代である。戦後頻繁に使われてきた「国際化 (internationalization)」という言葉は国 (nation) の存在を前提に国どうしの関係の強まりを意味しているが、「グローバル化」は文字通り「地球 (globe) 化」であり、国境を越えた地球規模での統合が進むことを意味している。

この一九八〇年以後のグローバル化を推進した主な要因は、人間の活動範囲の拡大、国境を越える情報ネットワークの形成、グローバル市場の成立である。人間の活動範囲は、交通機関の発達とともに長い期間を経て断続的に拡大してきたが、二〇世紀後半の航空機の普及と空路網の拡充により一気に地球規模に達した。今では、二四時間以内に世界の大都市のほとんどを訪れることができる。国境を越えた人の移動が拡大し、国境を越えた情報ネットワークが形成されるのとはほぼ時を同じくして、資本も自由に国境を越えるようになり、世界各地の金融市場は相互に深く依存す

るようになった。このようにモノや人、情報、資本が国境を越えて自由に行き来する場は、一般に「グローバル市場」と呼ばれている。このグローバル市場は、文字通りに地球(globe)全体を覆っているわけではないが、その範囲は急速に拡大し、中心地域の統合の度合いはおそろるべき速さで強まっている。情報技術の革新と密接に関連しながら進出したグローバル化は、人間活動のほとんどあらゆる領域に影響を与え、私たちの活動の前提条件を根底から変えてしまったのだと思う。

私たちは、独立し完結した社会をもつ主権国家を前提に、世界をその集合体という具合に捉えてきたが、現実はずでに、国民への影響力を低下させた国家と、国境を越えて活動し大きな影響力を行使する様々な非国家組織が競合する世界へと移行している。モノや人、情報、資本が国境を越えて自由に行き来するようになれば、国単位の社会的完結性が大きく損なわれ、主権国家の性格や機能、役割は大きく変化する。グローバル化は企業や人々の国境を越えた活動を促し、様々な分野での交流を促進し、経済活動を活性化・効率化させたが、周知のとおり、同時に深刻な問題や懸念を生み出した。二〇〇〇年以後に世界中で頻発したイスラム過激派テロは、グローバル化が進む世界で、国外に拠点をもつ組織がいかに容易に国境を越え、殺人・破壊活動を行うことができるか、敵意をもつ一握りの集団が大量破壊兵器を使うことなく、いかに容易に社会に壊滅的な打撃を与えることができるかを示した。一九九〇年代末以降、とりわけ、中・東欧諸国などの十か国がEUに参加した二〇〇四年以降、英国への移民が急増したが、

移民の急増は英国の医療・教育・社会保障費を増大させ、人々に雇用・治安悪化への不安を抱かせた。移民規制を求める声は大きくなり、EU加盟国内の「人の自由移動」への反発も強まった。移民規制を求める動きとEUに奪われた主権を取り戻す動きが結びつき、EU離脱の主張が強まり、二〇一六年に英国のEU離脱が決定した。英国のEU離脱は二〇二〇年に実行されたが、英国への移民は二〇二二年におよそ一二〇万人に達している。

また、グローバル化によって先進国の労働市場が二極化した。グローバル化が進む労働市場では、同一サービス(同じ仕事)への対価が同じ額に収斂していくが、先進国と途上国の間に労働者の賃金の差がある場合、先進国の企業は途上国の安価な労働力を利用するインセンティブが働くため、仕事や職が途上国に移動することになる。こうして、先進国では失業者が増加し、途上国の労働者と競争する労働者の賃金は低下していく。他方、一握りの優秀な人材にとっては世界の躍進の舞台となり、彼らをめぐる人材獲得競争は激化し、その報酬が高騰することになる。つまり、先進国の労働者の賃金には下方圧力が加わる一方、少数の優れた人材の報酬は高騰し、先進国内で所得格差が拡大する。

少し前になるが、二〇一六年に行われた英国のEU離脱決定とトランプ氏のアメリカ大統領当選は、グローバル化と国家の関係を考えるための興味深い例を示している。アメリカ第一主義も、移民の制限・排斥も、グローバル化によって希薄になった国としてのまとまりを取り戻し強化しようという意志を表明したものである。他方、英国のEU離脱決定は、英国がEUという上位の政

治的・経済的枠組みの一部であることを止め、部分的にはあれE.Uに取り上げられていた主権を取り戻す動きだと考えることができる。二〇一八年には、IT企業、とりわけ、ガーファ（グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップルの頭文字を並べたGAFAM）と呼ばれる四つの米国巨大グローバルIT企業に対する批判が強まり、米国・欧州・日本でも、それらへの規制が議論された。この問題は、インターネット上に人々の活動の基盤を提供して利益を得ている巨大グローバルIT企業とそれらによって不利な立場に追いやられた個人と企業を保護しようとする国家との対立が顕在化したものだと言える。

ただし、グローバル化の進展は、国家組織の消滅を意味するものでも国家組織が不要となることを意味するものでもない。相互依存が深まったグローバル市場でのネットワークやシステムのトラブル・不具合は甚大な被害を及ぼす可能性が高いが、グローバル市場を管理する中枢や組織はなく、責任を負う主体もない。強権国家やテロ組織による情報ネットワークの悪用・破壊工作を防ぐための対応も国家に頼るしかなく、パンデミック対応も国家ごとになされた。経済的依存関係が密になれば国家間の深刻な対立や戦争は抑止されるという議論がなされたこともあったが、グローバル化の進展によって国家間の対立や戦争がなくならないことは、中国とアメリカの対立の激化やロシア軍によるウクライナ侵攻を見れば明らかだろう。ハマスによるイスラエル攻撃は攻撃の意思をもつ集団が容易に戦争を引き起こす現実を再認識させた。人間が他者を犠牲にしてでも自己の欲求をみたそうとするかぎり、

対立と戦争は続く可能性が高い。個々人を守る役割を期待できる組織は、現状では国家以外には考えられない。国家の力は確実に衰え、国ごとの安全装置は機能しなくなりつつあるが、それでも私たちには国家以外に頼るものがないのである。

ただ、私たちは、国の政策・施策の限界を意識することが重要だ。グローバル化した経済活動が支配的な状況では、外部と遮断して、国内の動きを予測したり国内政策を実行したりすることは不可能に近い。かつては、日本人の活動のほとんどが国境内で行われていたため、為政者は国内の様々な問題を日本という枠組みの中で処理することができた。日本の法律や制度を整えれば、多くの問題に対処できたのである。しかし、それが以前のように機能しなくなった。グローバル化が進展し、人も企業も資本も自由に国外に移動するという基本的な状況を認識せずに、閉じた国を前提とした従来型の政策を実行すれば、その政策は思い通りの成果を挙げることができないばかりか、状況を著しく悪化させることになる。

グローバル化が進行して国の枠組みが弱くなり、様々な要素がからみあって複雑化した世界を認識するのはきわめて困難になった。その結果、多くの人は、真偽とは関係なく、単純な世界観を提示してくれるものとびづくことになる。たとえば、現実とはかけはなれていても、単純化された世界観に基づく政策や提言は分かりやすく、多くの人に共感をもって受け入れられることになり、大きな危険を招くだろう。そのような中で、私たち歴史研究者は、複雑になったこの世界を理解すべく真摯に努力を重ね、グローバ

ル化の進展によって何が変わり何が変わっていないのかを、人々に誠実に伝えていくことが大事なのだと思う。

最後に、私が危惧している、仮想現実世界の拡大について言及しておきたい。インターネットを中核とする情報ネットワークは、現実世界のグローバル化を推し進めると同時に、情報がデジタル化されつながつた空間（電脳空間、サイバー・スペース Cyber space）を形成し、現実の物理的環境とは異なる仮想現実世界（メタバース Metaverse）を生み出した。私たちは自分がいる場所に制約されることなく、端末機器から自由にその仮想現実世界に出入りしている。コロナ禍で人と人との物理的接触の回避が求められた中で際立って進行した変化は、人々の活動のオンライン化だった。自宅から外に出ることなく、オンラインを使った会議や授業、診療が行われ、オンラインでの取引が急増した。オンライン化の急拡大は、仮想現実世界での活動を飛躍的に拡大させた。物理的には離れた場所にいる人が、意識の上では、あたかも同じ空間を共有しているかのように、仮想現実世界で活動する。物理的に言えば体の一部分を動かしているだけだが、意識は仮想現実世界を飛び回っている。そして、それは、意識の上では間違いなく私たちの現実世界の一部なのである。

かつては、閉じた国境の中で時間と空間を共有する密な人間集団が形成され、共通の世界観・価値観をもちやすかったと言えるが、個々人が特定の仮想現実世界で時間を過ごすことが日常化していくと、人々は国境を素通りする大量の情報の中から自分の関心にあったものを取り続け、現実から乖離した疑似体験が蓄積さ

れていく。そして、その人固有の世界観・価値観が形成されていく。自分が生活している物理的な現実世界を離れ、国境を越えた場所にいる人々と価値観や世界観を共有することも難しくないだろう。私たちは、今、国境の障壁機能が弱くなった環境の中で生きていくのである。グローバル化、さらには、仮想現実世界の拡大により、経験の個人化が進み帰属意識や世界観・価値観の共有が「国」という政治的まとまりでは形成されにくくなった。個々人の関心や好みに応じて情報が取捨選択され、偏った経験・疑似体験の蓄積に基づいた世界観・価値観が形成されるのだとすれば、それは物理的な現実世界から遊離したものになる可能性が高い。この領域をどのように扱うかが、歴史家にとって、今後の重要な課題となるだろう。